

田鳳徳博士の思い出

畏友田鳳徳博士と私とのかかわりあいには 1926年、当時の官立京城師範学校普通科入学以来足掛け 56年にもわたっており、思えば今日まで半世紀以上ものずいぶん長い歳月を経て来ている。その間の博士のたゆまぬ精進と前進とは、私にとって驚異のまとなっている。

京城師範時代の田博士は、級友たちから、その名の日本読みをもじって「デンホウ が トク」(出ない方が得)であるのに、展覧会とか弁論大会とか柔道の対抗試合とかあらゆる種類の諸行事に出馬して、しかもそのいずれにおいても輝かしい業績を挙げるものだから、実際は「出た方が得」の人物だと評されていた。つまり、その名の日本読みからは、表面に出ないでひっこんでいる方が「トク」(利得)であるのに、その実際は「往くとして可ならざるはなし」の人物だというのである。

しかし、他面田博士は「出処進退」はきわめて厳正で、自らの所信を枉げてまで「出た方が得」を実行する人でないことは、最近十余年間の同博士の事情を知る人はよく理解していると思う。

京城師範時代の田博士の思い出はつきないが、私が鮮かに記憶しているのは解放時のことである。

当時、私は、京城帝国大学理工学部の学生主事と附設理科教員養成所の教授を兼任していたが、解放直後は理工学部のあと仕末のため、今日のソウル特別市中区の自宅から孔徳里の理工学部にはほとんど毎日通っていた。そのような時、ある日偶然、東大門の近くの鍾路通りで田博士に出くわした。何ごとかを深く思索しつつ静かに歩いていた博士に、今度はいよいよ国家の大役を引きうけることになりますね、と私が声をかけたのに対して、ただ有頂天に解放を飛び上って欣ぶというような態度ではなく、深く民族や国家の前途

を憂うような、むしろゆううつなおももちで、いやこれからが大変なんだよ、と答えられ、私はむしろ拍子抜けした感じをもったことを覚えている。常に出処進退を深く考えておられたのだと、今になって感服している次第である。

私は、京城師範卒業後、黄海道の黄州小学校に1年間奉職したのち京城帝国大学予科の文科に入学した。その2年生のとき、つまり1939年、私は京城帝大予科学友会の総務委員として、南満州医科大学予科との定期対抗競技大会の下打ち合せのため奉天に赴いた。その時、田博士は、奉天の韓国人子弟のための普通学校に奉職しておられて、奉天市内を案内して頂き、生まれて初めてダンスホールなるものに連れて行ってもらったことがある。その時田博士は私には何も言われなかったが、翌年京城帝大予科に入学されたのであった。大学学部に進学の後は、私は法文学部の哲学科、田博士は同学部の法学科に所属していたため、教室でお会いすることは皆無であったが、いつも図書館でお姿をみかけた。博士は在学中に司法・行政の高等文官試験に合格されたのであった。しかし、今日になってみると、日本の体制下での高文合格は日本の体制下の高級官僚への途であったことにまちがいはないとしても西欧近代法思想に基いて緻密に構成し上げられた日本の近代法体系に通暁したことは、根底的に近代法・国家思想を体得されたことであって、それはひとり狭く日本の法体制に通暁したことにとどまるものではない。そのことは韓国の歴史にも数多く見られることであって、李退溪先生などは中国思想の代表である朱子学を深く学びながらも、そこに盛られた普遍的思想を韓国に土着させたもっとも韓国的な思想家となられた例からも理解できるであろう。日本の高文合格は日本的体制の走狗化であるなどと考えるのは浅慮も甚しいと言わねばならないであろう。

解放後は、私は、1969年1月に初めて訪韓した。それ以来私は韓国教育史の研究に専念して来たが、ほとんど毎年二乃至三回の訪韓の度毎に、関係文献や韓国社会の新旧の具体的諸事情について数多くの貴重な御示教を忝くしている。韓国教育史学というのはたいへん難しい学問で、「韓国」がよくわからねばならぬと同時に、「教育」についての本質的理解と「歴史」とか

「史学」についての基本的理解が伴わなければならないので、ただ韓国の古い文献だけ見ておればよいという狭い範囲にとどまり得ないのであって、泰西の碩学の書にも常に触れなければならない、他面韓国社会の具体面や国民の生活や心情についても深い洞察を必要とする。そういうとき、近代法・国家思想の根本についての深い造詣と韓国社会の中での正しい出処進退に処して来られた経験に即しての田博士の言々は、そのいずれもが私にとってこのうえなく貴重な指針となって来ている。

田博士の学問上の業績については、私には何事かを語る資格はないが、博士の学位論文「暗行御史の研究」を日訳出版したことがあるので感ずることは、最近の業績「韓国近代法思想史」にもみられるような透徹した理論および思想が、常に文献的実証に裏づけられていること、逆に言えば理論・思想の裏打ちを蔽する実証ということである。世には実証史学の美名の下に、現象的な文献的記述抜き書きの並列的羅列や部分的事象の点と線的配列をもって能事おわれりとする向きもあるが、暗行御史制度の国家における行政管理機構としてのそれを、法理論を踏まえつつ実証し上げて行く博士のアプローチは読む者に韓国についての統合的歴史像を描かせてくれる。あれこれの事象の古ごとのもの知りに終止しないような歴史叙述は容易なことでない。そういう点で博士の労作はただのお国自慢に墮することない歴史学の正しい地平をひらいて来ていると言ってよいであろう。そして、このことは、単に博士の理知的能力にのみ因由するものではなく、調和のとれた、心情的ハネ上りを極力おさえる全人的人格からにじみ出るものと言うべきであろう。

博士は、古稀を迎えてなお健在であるが、近時若干の身体の不調が伝えられる。健康上への格段の留意自愛のうえ、今後尚一層の御発展あられんことを切に祈るものである。